

ヘレニズム概念と古代史家（一）

田 中 穂 積

はじめに

J・G・ドロイゼンが時代的特徴をさす言葉としてヘレニスムスの用語を使用して以来、それを適用して、ヘレニズム時代あるいはヘレニズム世界という表現を一般的に用いている。この点において、ヘレニズムの用語の使い方は近代である。そして現在の史家は、このヘレニズムの概念は古代の作家たちには知られていず、また当時のギリシア語のうちにそうした意味を見出せないとする⁽¹⁾。もちろん、そこにはヘレニズムとは過去の研究にみられるようなギリシア史の特殊的发展の強調ではなく、ギリシアと東方の両側における以前からの連続性の強調と、ギリシア人と東方民族の相互が影響を及ぼし合った度合いの再評価といった研究動向を踏まえた見方にあることは、いうまでもない。

しかし、この立場はさておいて、本来のヘレニズムの概念はギリシア風という視点から出発している。近代において、ギリシア風という表現が問題にされたのは、新約聖書にむけられた研究からであった。十七世紀初頭、J・ドルシウスは『使徒言行録』にみえるヘレニスタイ、すなわち「ギリシア語を用いる者（ユダヤ人）たち」（六一一）と

は、「ギリシア語の方言」(dialectos hellenistica)としての特有の言語を話す者たちと解釈した(一六一二年)。尤も、これよりも早くJ・J・スカリジエールはヘレニスタイの語に注目しており、この語が彼の弟子たちの間で論争点となった。いわゆる lingua hellenistica についての論議である。新約聖書のギリシア語は特別の方言であると、かなりの学者がスカリジエールの頃に主張したことに對して、スカリジエールの弟子の一人C・サルマシウスは、リングワ・ヘレニステイカの名称で呼ばれる言葉は広く一般的になっていたとする見方をたてた(一六四三年)。彼の論証は十九世紀初期においても、リングワ・ヘレニステイカがギリシア語文法に残存したことからも妥当性をもっている。

その後、古代のギリシアとローマを人類史における青年期と壮年期とみたJ・G・ヘルダー(三十歳頃、一七七四年)は、次いで論じた新約聖書の解釈において、ヘレニスムとはギリシアと東方の觀念の混合であり、それを世界的現象ととらえた。つまりギリシア語はアジア的思考の外衣をなし、すべての精神的要素、すなわちギリシア的、ユダヤ的なのととともに、さらにオリエンタ的なものもギリシア風に理解されたとする。オリエンタ的とはカルデアやペルシアの知識であり、これらが従来、漠然とギリシア化されたユダヤといったものに加えられ、ここにヘルダーのヘレニスム解釈は広がっていった⁽⁸⁾。ここにいたって、ヘルダーとドロイゼンの類似性が見とめられるのである。また古典学者P・ブットマンは次のように表現した。オリエンタにおける非ギリシア住民のアジア人、シリア人その他のものがギリシア語を話し始めたので、それでギリシア語を話す彼らはヘレニステスと呼ばれた。そして、多分に非ギリシア的形式とそれにオリエンタ的言い回しという、混合の書き方をするそうした著述家の表現をヘレニステイシユ文体と呼ぶとしており、ここではブットマンは特に七十訳聖書、あるいは教父たちを指している。彼はこのヘレニステイシユ言語という使用法を近代的な慣用語であるとする。これがドロイゼンにかほど影響を与えたであろうか⁽⁹⁾。

こうしたヘルダーやブットマンにいたるヘレニスム解釈は、ドロイゼンに橋渡しする準備がなされていたとみて

よいであろう。もちろん、広く指摘されているように、ドロイゼンはヘーゲルの世界史を理性、自由の精神の発展とみる立場、また一方では古代史家 A・ベックの先験的思索を避ける歴史の見方、などから強い影響をうけたことはいりまでもない。ドロイゼンはヘレニズムスをギリシア文化をキリスト教に導く期間とし、この時期の特徴を西方と東方相互の民族的、文化的結合とみた。つまり、ギリシアで蓄積された成果が人類の新しい集積状態へと生産的に発展した時期で、それは古代の現在であった⁶⁾。ドロイゼンによって提出された宗教的、文化的、政治的意義はその多様性という基盤のもとに、多くの問題をもたらした。彼はまずアレクサンドロスの歴史を著わした。次いで前二二〇年にいたるヘレニズム史を書いたが、その政治史のなかで、文化がいかに掛かり合うかについて、所々に問題点をあげているが、ついに文化面を論述の体裁でもって著わすことはなかった。現在、ヘレニズム時代という表現には大方の了解がなされているものの、政治、文化、宗教等の多様な面からの考察において、種々の見解がみられるのは、周知の通りである。

註

- (1) Austin, M. M., *Journal of Hellenic Studies*, 107 (1987), 229 (Notices of Books) ; *Cambridge Ancient History*, 2nd Edition, Vol. VII, 1, Hellenistic World, Cambridge (1984), 263 (J. K. Davies) ; cf. S. Sherwin-White and A. Kuhrt, *From Samarkand to Sardis : A new approach to the Seleucid empire*, London (1993), 186-7. 本邦では最近のクニヒスヤ 研究の成果が『大正十一年』『ヘレニズムとローマ』歴史のなかの文化変容』『ネルヴァ書房』一九九三年。
- (2) Laqueur, R., *Hellenismus*. Akademische Rede zur Jahresfeier der Hessischen Ludwigs-Universität am 1. juli 1924, Giessen (1925) (=Schriften der Hessischen Hochschulen, Universität Giessen, Jahrgang 1924, Heft 1), 27-8, Anm. 9 ; Pfeiffer, R., *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850*, Oxford (1976), 123 ; Bichler, R., *Hellenismus : Geschichte und Problematik eines Epochenbegriffs*, Darmstadt (1983), 35-6.
- (3) Herder, J. G., *Erläuterungen zum Neuen Testament aus einer neueröffneten Morgenländischen Quelle* (1775), in ; *Herders Sämtliche Werke*, Herse. v. B. Suphan, Bd. 7, Berlin (1884), 338-340 ; Bichler, R., *op. cit.*, 39-42.

- (4) Pfeiffer, R., *op. cit.*, 123, 189; Bichler, R., *op. cit.*, 34; Droysen, J. G., *Geschichte des Hellenismus*, I, Hamburg (1836), S. vi. (「ヘレニズムの語を以てあの西東の民族融合の言葉とすることは、古代からの伝統である」)
- (5) Droysen, J. G., *Historik, Vorlesungen über Enzyklopädie und Methodologie der Geschichte*, Hrsg. R. Hubner, München (1937), 425; *Geschichte des Hellenismus*, II, 2. Aufl., Gotha (1878), 253; *Geschichte des Hellenismus*, III, Hrsg. E. Bayer, Tübingen (1952), III, 418, 318.

一 前四世紀における歴史意識

古代史またヘレニズム史の泰斗であったH・ベンクトソンは、政治的、文化的にもギリシア人の生活に新しい変化がおこるのは前四世紀半ばであるとみた。その観点から、ヘレニズム時代をアレクサンドロス大王から始めるのではなく、政治上でのマンティネアの戦い(前三六二年)、マケドニア王ピリッポス二世の即位(前三五九年)などの主要な出来事を勘案して前三六〇年からとし、その終りをアウグストゥスの時までとする⁽¹⁾。このような始点にたつ見方からすれば、前四世紀における時代の変化を読み取った一人として、イソクラテスの名をあげることができ。彼は前三八〇年頃の『祭典演説』のなかで、ギリシアの学校であるアテーナイの文化を誇り、そしてギリシア人は種族的、血縁的関係を指すものではなく、知性とわれわれのパイデア(教養・文化)に与るもののものであるとし(Paneg. 50)'² また『アンティドシス』においては、アッティカ方言は共通性(コイネー)と調和性を有する言葉であるとす(Anuid. 296)。³ ここにはアテーナイ文化を中心とする汎ギリシア文化の思想がみられる。しかしイソクラテスには、なおギリシア(文化)対バルバロイ(文化)といった考えは残っている。その強調は『ピリッポスへ』(前三四六年)におけるバルバロイ人を夷狄とする見方で、彼はピリッポス二世を名指して、ギリシアを統一し、非ギリシア

人に対して征戦すべきことを促している (Philipp. 16.)。このイソクラテスの下から、エポロスとまた門下とおもわれるテオポンポスなど著名な史家がでてくる⁶⁰⁾。

キュメの出身であるエポロスは、主著として二九巻からなる史書を著わした (前三五七／四六年を扱った第三十巻は息子子のデモピロスが補った)。彼は神話時代を意識的に避け、ヘラクレイダイの帰還から、彼の時代にいたる出来事を述べたが、その叙述の流れは編年的ではなく、民族に視点をおいたもので、ギリシア人、バルバロイともに扱われており、そのうち第二七巻にはピリッポス二世の北方における活動が含まれている。ポリュビオスは、このエポロスの作品を最初の普遍史とみなし、その叙述の方法や独創性を評価しているが、戦争についての知識の弱さをついている⁶¹⁾。ストラボン⁶²⁾はエポロスについて、その叙述は合理的としながらも、一方では偏愛的なナシヨナリズムがみられ、無批判な面があるとしている⁶³⁾。しかしエポロスの歴史が通俗的なものであったとしても、普遍史を叙述し、そこにピリッポス二世の存在を位置づけようとしたことは、彼が時代の変化を意識してのことであった。

他方、キオス出身のテオポンポスは、ラコニア壘員のゆえにそこを追放され、ピリッポス二世の宮廷でかなりの期間滞在していたとおもわれる。前三三三年にはアレクサンドロスの執り成しで再び故郷に帰ることができたが、この王の死後また追放された。後に、テオポンポスはプロトレマイオス一世の宮廷に留まったが、ここでも王と衝突を引き起こしている。ともかくも、こうした事情のために全ギリシアを遍歴しており、これによって多くの資料を収集し、見聞を広めることができた。彼は初期において、修辭家として活躍しており、その修辭スタイルがイソクラテスに類似しているため、往々にしてイソクラテスの弟子とみなされてきた。彼にはヘロドトスに関する著述があるが、後代に影響を及ぼしたのは『ヘレニカ』(Hellenika)と『フィリッピカ』(Philippika)である。『ヘレニカ』はトゥキュディデスの『歴史』を継いで、前四一一―前三九四年の間、クニドスの戦いにいたるまでの十二巻からなり、スパルタの優位をとりあげている。ところで、『ピリッピカ』五八巻は、その大部分がピリッポス二世の宮廷で書かれており、

またこれは同名の題目でよばれる作品の先駆けをなすものである。年代的にはピリッポス二世の個性と支配をもって始まるが、この王の行動のみを取り上げたものではない。時間的、空間的にもピリッポス二世やマケドニア人をこえた、ヘレネスとペルシア人やエトルリア人なども視野に入れたバルバロイについての歴史であって、エポロスの作品と同様に普遍史というべきものであった(F 25=Phot. Bibl. 176, p. 120)。この作品の史料については明らかにしえないが、多くの史料を駆使して詳細に述べられており、またヘロドトスの方法に従い、地誌、神話、人物、奇譚、その他あらゆる余話が豊富にもられている。こうしたスタイルは哲学的思考をふまえて歴史事実を論じようとするもので、ヘレニズム的特色の先駆とみることができるとは思われる。しかしテオポンポス批判にあたって、ピリッポス二世の宮廷をなす者の集まりと評したポリュビオスは、テオポンポスが『ピリッピカ』を書くために『ヘレニカ』を捨てたこと、つまりギリシア人の歴史をピリッポス二世の下においたとして、激しく非難している⁴⁾。後にアンティゴノス朝のピリッポス五世が、『ピリッピカ』からピリッポス二世に係わるものだけに限定させたとき、十六巻本に縮んでしまったとされる(T 31=Phot. Bibl. 176, p. 121)。この作品にみられる余話はそれ自体、一つの話として、それぞれ別のタイトルによって後代に伝わっているくらいである。彼は政治家のだらしなさや放埒をあげているが、後代の引用が恣意的な場合もありうることに注意しなければならない。しかし総じていえば、厳格なモラリストであったとおもわれ、彼の人物批判の特徴は従来の修辭的表現に代わってドラマチックな表現をとっており、ヘレニズムの特色がみられる。このゆえに『ピリッピカ』は多くの人に読まれ、コルネリウス・ネポスやプルタルコスなどは直接に利用したとおもわれる。

はやくにアレクサンドロスの行為を記述したのはカリストテネスであった。彼は伯父とみられるアリストテレスのもとで成長し、アレクサンドロスの東征に宮廷史家として随伴した。彼には主著として『ヘレニカ』(Hellenika)と『アレクサンドロスの業績』(Alexandrou praxeis)がある。『ヘレニカ』の方は、大王の和約からピロメロスのデルポイ神

殿の占領まで、つまりスパルタの没落とテバイのヘゲモニーを含む、前三八六―前三五六年である。これはテオポシポスの『ヘレニカ』が終わった後から、『ピリッピカ』が始まるまでの三十年間に当たる。『ピリッピカ』の後、カリステネスの『アレクサンドロスの業績』が始まる。したがって、カリステネスの作品はテオポシポスの作品を年代的に補うように、重複を避けている。これはカリステネスがテオポシポスとの競合を嫌ったとみることができよう。またそこには、カリステネスがピリッポス二世とギリシア人の争いについての記述を避けることによって、汎ギリシアの統一を前面に押し出そうとする意図があったとする見方もできる⁹⁾。彼のアレクサンドロスに関する記述はガウガメラの戦い（前三三一年）までである。しかし、その記述はアレクサンドロス伝の手本となった。つまり彼はアレクサンドロスがアンモン神殿でゼウスの子と告げられ（F 14a=Strabo, 17, 1, 43）、ギリシア人の先頭に立つ勇者と称えた。ここには、テオポシポスの記述を継承したカリステネスが、ピリッポスに代わるアレクサンドロスを通して汎ギリシアの理念を押し出す意図があったと受け取れよう。それはまた世界現象の要にアレクサンドロスを据え、そしてアレクサンドロスを人間領域の上に持ちあげようとするものであった。しかし、彼はアレクサンドロスへの跪拝の礼に反対論を唱え、また近習のアレクサンドロス暗殺計画に影響を与えたとの嫌疑を受け、処刑されたともいわれている。そこにはカリステネスが自分の筆致によってアレクサンドロスの名を高めたという自負があったこと（Arrian, 4, 10, 2）、それがアレクサンドロスの感情を逆撫でし、他方ではマケドニア兵の感覚以上に、アレクサンドロスの地位を高めたため、マケドニア兵の反感を買ったとも考えられる。

カリステネスの後、少なくとも十二巻からなるアレクサンドロスの遠征を書いたのはクレイタルコスであった。彼はアレクサンドロスと同時代であって、この王の東征に参加したか、どうかは不明である。彼の原本については詳らかにできないが、その彼の記述はカリステネス風にアレクサンドロスの戦征やアレクサンドロスを表現すること（F 9）、つまりドラマ的效果をねらうことにあった。当時、アレクサンドロスに同行した者は遠征をセンセーショナ

ルに表現していたことから、クレイタルコスにより普及的なアレクサンドロス史の記述を意図したとおもわれる。彼の作品はキケロ時代には広く人気があり (Fr. 34 || Cic. Prut. 42-43)、またディオドロス、クルティウス、イウスティヌスのような史家に利用されていることは、彼の意図した効果が現れているとみてよい。

主としてテオポンポスからクレイタルコスにかけて、彼らがピリッポス二世とアレクサンドロスを取り上げ、そしてそれぞれがいかにして新しい時代の見方を提供したかについて概観してきた。しかし、それは多分に時代に迎合したものであり、またそれを避けて通ることはできなかった。さらに、アレクサンドロスと同時代の多くの者たちがこの王の戦歴と支配を偉業ととらえて、数々の記録を残した。アリアノスが比較的信頼できるとしたプロトレマイオス(一世)もその一人であるが、しかし多くの場合、そこには時代の変遷を見抜いた史的洞察がみられたかは疑問である。数多くのアレクサンドロス伝がでたあと、二世紀半ばにアリアノスは『アレクサンドロスの東征』を書いたが、彼はアレクサンドロスの壮大な功業は無比のものであり、それを書けるのは自分をさしおいて他にないとする (Anab. 1, 12, 1-5)。彼の叙述には、それなりに歴史を十分に把握する態度が認められるが、彼自身、カリステネスと比較する意図があったとみてよからう。

註

- (1) Bengtson, H., *Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die römische Kaiserzeit*, 5. Aufl., München (1977), 295-300; Id., *Die hellenistische Weltkultur*, Stuttgart (1968), 9.
- (2) 本稿であげる史家とその作品(断片)の語彙: Jacoby, F., *Fragmente der griechische Historiker*, Berlin-Leiden (1923-58) に収録されたもの (FGHと略記; T=Testimonium, F=Fragment)。ディオドロス (no. 70), テオポンポス (no. 115), カリステネス (no. 124), クレイタルコス (no. 137), ヴロキアノス (no. 680), アプテラの(カタイオス (no. 264), マネトン (no. 609)。

史学史については、栗野頼之祐「ヘレニズム時代の史学史」『関西学院史学』Ⅲ(一九五五年)、一一九頁。藤縄謙三『歴史

学の起源—ギリシア人と歴史』力富書房、一九八三年

- (3) Ephoros, T 7; F 23; F 20=Polyb. 5, 33, 2; 12, 28, 10-11; 12, 25, 1-5.
- (4) Ephoros, F 31b; F 114a; F 42=Strab. 9, 3, 11; 12, 3, 21; 7, 3, 9.
- (5) Polyb. 8, 9, 6-13; 8, 11, 4; Walbank, F. W., Polemic in Polybius, *Journal of Roman Studies*, 52 (1962), 1-2. (=Selected Papers, Cambridge (1985), 263-4).
- (6) Pearson, L., *The Lost Histories of Alexander the Great*, New York (1960), 25, 29.
- (7) Stadler, P. A., *Arrian of Nicomedia*, The University of North Carolina Press, (1980), 65, 212-3, n. 23.

二 オリエントの史家と歴史意識

イソクラテスがアッティカ方言をもってギリシア語の共通語とすることを提唱したが、そこには後のいわゆるコイネーの感覚が底流している。後に使用されるようになったコイネーとは、その概念は曖昧ではあるが、古い方言とは異なる一般的に共通性を有するヘレニズム・ギリシア語というべきものであって、ヘレニズムの象徴といえよう。一方、ヘレニズムの語源的発展としては動詞の *hellenizein* と、その派生語としての *hellenismos*, *hellenistes* の用法が知られている。アリストテレスは弁論の最初の条件として、ギリシア語の熟達という意味で、ヘレニゼインの動詞を用いており、彼の弟子テオプラストスはさらに名詞としてヘレニスモスを使った⁶⁾。これらの語の反対の意味がバルバリゼイン *barbarizein* であり、バルバリスモス *barbarismos* である。さらにヘレニスモスがギリシア語だけでなく、ギリシア人の慣習などの模倣を意味したことは『第二マカベ書』(四—二三) から知られるし、またギリシア語を話す人をさすヘレニステスが『使徒言行録』(六—一) に現れていることはよく知られている。

コイネーが何時頃から普及したかは確実にしえないが、オリエント人がギリシア語でもって自国の歴史を書いたことは、ヘレニズム思潮に対する反応と、その受容と受け止められる。知られているところでは、パピロンのマルドゥ

クの神官ベロツソスが最初にギリシア語で歴史書を書き、アンティオコス一世に献呈した。それは多分『バビロニア史』(Babyloniaka) と呼ばれた三巻本で、バビロニアの地誌に始まる序言、そして文明の起源、人間の発展(第一巻)、洪水以前のバビロンの神話的な十人の王、洪水、洪水後の王朝(第二巻)、アッシリア人、バビロニア人、ペルシア人、そしてアレクサンドロスの支配にいたる歴史(第三巻)が取り上げられている。その特色はこれまでギリシア人が駆使できなかったバビロニアの史料を用いたことにある。しかし、その叙述形式は多分にギリシア的である。アレクサンドロスの東方支配とともに、ギリシア人は広範にわたる地理知識を吸収し、同時に諸民族に対する関心も深めた。そこにみられる民族誌記述の傾向は、従来の宗教や習俗の他に、政治形態、民族の起源の特徴といった要素が加わっている。それはヘロドトスの歴史記述の伝統を踏まえながら、プラトンやアリストテレスの政体論などの影響を受けたとみることができよう。したがって、ベロツソスの記述にみられる史料の配置、その説明にはヘロドトスの形式と、後で触れるように、それを継承して、前四世紀末に『エジプト史』を著わしたアブデラのヘカタイオスの叙述に類似していることが指摘されているが、この観点からすればバビロニアの習慣について、重要とおもわれる部分が欠落している⁹⁾。しかし、他方では、バビロンを建設したのはセミラミスであるとするヘロドトス以来のギリシア人の誤った見方を正そうとしており(F 8=Joseph. c. Ap. I, 142)¹⁰⁾ またセンナケリブの時代、キリキアでギリシア人が蜂起してアッシリア軍と戦ったという珍しい話を取り入れているが(F 7=Euseb. (Arm) Chron. p. 13)¹¹⁾ これはギリシア人読者に対するサーヴィスなのであろうか。

ベロツソスは支配者の変遷について、アッシリア人、バビロニア人、ペルシア人、マケドニア人としている。後にローマ勢力の東方への進出時期、世界帝国として、アッシリア、メディア、ペルシア、マケドニア、ローマといった見方があらわれている。この見方がオリエントにおいて形成されたというよりは、むしろギリシア人の歴史のとらえかたとする考えの方が強くなっている¹²⁾。

もちろん、ペロッソスが世界帝国の問題を論じようとしたか、どうかは断片から推察することは困難である。しかし、彼はメディアの代わりにバビロニアを置いているが、それは後で述べる『ダニエル書』の場合と同様に、いわゆる新バビロニア帝国を強調する姿勢があったからであろう。A・クルルは、ペロッソスはギリシア人が帝国の変遷をアッシリア、ついでメディアとしていた思想を知ったうえで、それに反論あるいは修正を試みた結果であり、彼女は仮定と断りながら、ペロッソスはアッシリア帝国以前にいくつかの帝国があったこと、そして帝國的にはアッシリア帝国に匹敵するだけの新バビロニア帝国に引き継がれたという見方をしたのではないかと推定している。そのうえで、彼女はペロッソスがギリシア哲学の概念とヘレニズムの歴史叙述の原理に合わせてバビロニア史を再構成し、それが出来るほどにギリシア語の文体に熟知していたとみる⁴⁾。

ペロッソスが著名な天文学者であったことは確かであろう(Hyatt)。しかし、彼がコス島における天文学の祖であったか、どうかは確実にしえないが、このような学者がバビロニアの古い歴史と文化をギリシア人に知らせようとしたこととはうなずける。そしてアンティオコス一世に『バビロニア史』を献呈したのも、このアンティオコスが支配者というだけでなく、バビロンにおけるエサギラ神殿とボルシッパのエジダ神殿などを復興し、バビロニアを優遇する姿勢があったからであろう。ただ、バビロン近くにセレウケイアが行政、軍事目的をもって建設され、バビロンの地位が低下したことに對する反発があったとまでみる必要があるか。この点、複雑である。他方、ヘカタイオスがエジプトの古さを論じたとき、カルディア人はエジプトからバビロニアへ移住したと表現したが(Diod. I, 28, 1)。それに反発したためという推測、それはまたプトレマイオス朝に對するセレウコス朝といった図式へと発展的に増幅しているとする見方もできなくはない。

次にマネトンを取り上げるまえに、アプデラのヘカタイオスに触れておきたい。このヘカタイオスの主著に『エジプト史』(Aegyptiaka)があり、それは知遇を受けたプトレマイオス一世時代に書かれたとおもわれる。そこにはエジ

プトが文明の起源であり、すぐれた国家であったとする見方があらわれている。彼はその叙述を神話時代から始め、そして歴史時代、最後にエジプトの慣習を比較的詳しくあげている。また彼はヘロドトスやその他の作家のエジプトに関する記述を信用できないとし、エジプト神官の記録や彼が精査したものを取り上げるとしている (F. 25 || Dioid. I, 69, 7)。尤も、そこにはヘロドトスがあげたエジプトの慣習を採録しているが、しかし、そうしながらも新しい時代に即したエジプトのエスノグラフィを叙述したといえることができる。彼は古いエジプトのファラオの支配を理想的な社会と見立てており、当時の作家の多くに共通する異郷についての表現がみられるが、そこにはエジプトのナシヨナリズムを強調せんとした神官のプロパガンダを取り入れたことも予想される。この点、そこにはエジプト支配に臨んだプトレマイオス一世に対して、エジプトの伝統を踏襲すべきことを示唆したとする見方、さらには、この王のギリシア人優遇政策に対する批判が込められているとする見方などが考えられる。ともあれ、ヘカタイオスのような歴史叙述とその思想は、後にディオドロスの歴史記述において格好の材料とされ、その『文庫』第一巻の主要典拠になっている。

ヒエロポリスの神官マネトン¹⁾は、ペロッソスよりも後で主著『エジプト史』(Aigyptiaka)を著わした。またパレロンのデメトリオスの助力をえて、アテーナイ人でエウモルピダイ家の神官ティモテオスと協同して、ギリシア・エジプト的な新しい神であるサラピスの崇拜をつくりあげた (T. 3; Plutarch. De Is. 28)²⁾とされる。ここではギリシア的なもの³⁾とエジプト的なもの⁴⁾の折衷を試みたわけであるが、『エジプト史』においては史料上の制約があったとはいえ、直接⁵⁾にエジプトの資料を用い、従来のギリシア人による記述の誤りを正そうとし、ヘロドトスに対しては攻撃的であった (F. I || Joseph. c. Ap. I, 73)。彼は神殿の文書やその他の諸史料を基にして三十王朝の王位表をつくりあげたが、史的な出来事については、多分、中王国以来、書き記されたものを用いたとおもわれる。出来事に関する記述の断片は、殆どヨセフスの作品 (c. Ap. 『アピオンへの反論』)を通してしかみることができない。ただし、そ

こには、おそらく改竄されたとおもわれる反ユダヤ主義が濃厚に表出しており、原テキストの状態を正確に把握することはできない。しかし、そこにみえる表現からはエジプト人の宗教的、倫理的な面を描こうとしたことが推測される。尤も、エジプト人の宗教に関しては別著があったようである(49・50)。それはともかく、マネトンは一カタイオスの『エジプト史』などの影響を受けたとおもわれ、それは彼がエジプトの初期の王たちを神、神性の王、人間の王といった三段階に分けたことにあらわれている。それはまた、間接的であるが、エセフスが彼をギリシア人の教養を身につけた人物と表現していることからもうかがえる(51)。しかし他面において、彼の記述が王朝と王位年表を取り扱ったこと自体、一カタイオスの叙述の修正を試みたといつてよく、また彼のヘロドトス批判をみても、ヘロソソスに相通じる一面がみられる。

註

- (1) Laqueur, R., *op. cit.*, 24.
- (2) Murray, O., Herodotus and Hellenistic Culture, *Classical Quarterly*, 22(1972), 208-9.
- (3) Momigliano, A., *On Pagans, Jews, and Christians*, Wesleyan University Press (1987), 49-51; Kuhrt, A., Berossus? Babylonians and Seleucid Rule in Babylonia, in: *Hellenism in the East*, edited by Amélie Kuhrt and Susan Sherwin-White, London(1987), 47-8; cf. Swain, W., The Theory of Four Monarchies: Opposition History under the Roman Empire, *Classical Philology*, 35(1940), 7-9.
- (4) Kuhrt, A., *op. cit.*, 47-8.

—文学部教授—